

# [ライブラリー]

## ハンディキャップ教育・福祉事典

石部元雄・伊藤隆二・中野善達・水野悌一編  
福村出版

1994年9月刊 A5判・上製函入/1024

### I 巻 発達と教育・指導・生涯学習

- 序章 ハンディキャップとは何か
- 第1章 生涯発達の理解とハンディキャップ
- 第2章 視覚ハンディキャップと教育・指導・生涯学習
- 第3章 聴覚ハンディキャップと教育・指導・生涯学習
- 第4章 言語ハンディキャップと教育・指導・生涯学習
- 第5章 知能ハンディキャップと教育・指導・生涯学習
- 第6章 学習ハンディキャップと教育・指導・生涯学習
- 第7章 運動ハンディキャップと教育・指導・生涯学習
- 第8章 行動ハンディキャップと教育・指導・生涯学習
- 第9章 病弱・身体虚弱と教育・指導・生涯学習
- 第10章 てんかんと教育・指導・生涯学習

### 第11章 ハンディキャップと教育・指導・生涯学習の評価

### II 巻 自立と生活・福祉・文化

- 序章 ハンディキャップの自立と生きがい
- 第1章 ハンディキャップの自立と生活・福祉・文化
- 第2章 ハンディキャップと医療サービス
- 第3章 ハンディキャップと福祉サービス
- 第4章 ハンディキャップと心理療法・生活相談
- 第5章 ハンディキャップと運動・スポーツ・レクリエーション
- 第6章 ハンディキャップと進路・生活
- 第7章 ハンディキャップと工学
- 第8章 ハンディキャップと法律
- 第9章 ハンディキャップと社会

事典類を選ぶ側にとって、考えてしまうことがいくつかある。知りたい情報がどれだけ取られているか、他の事典にはない特色は何だろうか。少なくともいくつかは役に立つものであってほしい、そんな期待と不安がある。事典を編纂する側にとっても同じようなことがいえる。およそ完全な事典(辞典)というものは存在しない。できうることは可能な限りの情報を集め、他と一線を画す特色を創り出すことだろう。本事典の場合、そうした条件を意識してつくられたものと思う。とりわけ表題にその特色・方向性があらわれている。

表題にいわれる「障害」ということばを避けた理由について、「この概念が不明確であるうえに、「障害児」「障害者」は「障害物」と混同され、「邪魔なもの」とか「排除されるべきもの」と誤解されているから」とある。用字・用語をめぐる問題はとくに対象である人を表現する場合に問題となりやすい。養老孟司氏の「人称の違い」の表現を借りれば、一人称的「障害」は別として、問題は二人称の「障害」そして三人称の「障害」を用いる場合だろう。三人称的表現を用いても、意味する内容は多分に二人称的に迫るものであることが多い。距離感なのだろうか。表現としての尊重と内容としての理解。理解を超えた表現は関わりのないものとして遠ざけることになるだろう。

仮に「ハンディキャップ」にかかわる情報を人対社会といった図式により分けるならば、本事典のI巻はハンディキャップを負う人びとについての一次的情報を、II巻はハンディキャップをとりまく二次的情報をとりあげた構成といえる。I巻の特色は「視覚」から「てんかん」にいたるハンディキャップの9分類に、乳児期から老年期までのライフステージという軸を新たに設けた点だ。これまでに明らかになったこと、明らかではないが可能性としていえること等について解説している。II巻では社会的自立のために必要となる知見や情報、支援事項を可能な限りとりあげている。これまで分散した形でしか収集できなかった関連情報をハンディキャップを中心にまとめている欧米諸国との比較において、わが国の現状が明らかにされ、具体的に何が課題なのかがわかる。「もともと「ハンディキャップ」には「不利な状態にある人に、利益を得た人が不足分を補う」という人間平等の思想があった。だけれども互いに譲り合い、補い合い、扶け合っている社会」とまえがきにある。この「ハンディキャップ教育・福祉事典」は現在までの歩みを知る報告であり、また同時に21世紀に向けての願いをこめた提言でもある。

(東京成徳大学 佐藤至英)